

アメリカ長老教会礼拝書の略史

*Book of Common Worship*に至るまでの流れ

礼拝書と礼拝規準

- アメリカの長老教会は二つの文書を保有している。
- 礼拝規準：憲法規則の一部であり、したがって教会法的拘束力を持つ。礼拝に関する神学的指針を提供する。しかしながら、固定された式順や式文ではない。
- 礼拝書：礼拝規準に沿った式順と式文を提供する。使用は任意。
- 改革教会では礼拝書の方が、礼拝規準より長い歴史を持っており、改革派のコミュニティーでは、礼拝書を持っているが礼拝規準を持っていない教会の方が多い。

16、17 世紀

- イギリス・スコットランドの改革派はジュネーブに端を発した宗教改革に敵対的な国教会の中で改革を進めなければならず、結果的にはピューリタンの関心を反映していない礼拝書を強要されることとなる。
- 強要された礼拝書の使用に対する反発はやがて、礼拝書そのものへの反発と変わってしまう。
- 1644 年 ウェストミンスター信仰規準
- 1788 年 アメリカ長老派の総会が改訂を施したウェストミンスター信仰規準の使用を採択

19 世紀

- ようやくアメリカの長老・改革教会の間で、宗教改革の伝統に根ざしより公同教会的なリタージの伝統を回復させ、礼拝書の持つ価値を復活しようとする動きが始まる。
- 様々な礼拝書が執筆され、そのような資料の需要が高まったために北米長老教会出版局は礼拝資料集を出版
- 1894 年 南長老教会は礼拝式順、結婚式、葬儀式を含んだ礼拝の指針書を採択出版

Book of Common Worship – 1906, 1932, 1946

- 1903 年 北米長老協会総会が礼拝書の起草をを決議
- 1906 年 *Book of Common Worship* 出版
 - 内容：朝拝と夕拝の式順と式文、聖餐の祈禱を含んだ聖餐式、教会暦に沿ったいくつかの祝祭日のためのテキスト、洗礼と洗礼による誓約の確認、家族の祈りを含んだ祈禱集、いくつかの詩篇歌と古代のカンティクル
 - 交唱や斉禱を通して会衆の参加が奨励されている。
 - 祈禱は「古今東西」の祈禱が採用されている。
- 1928 年 大会が改訂委員を指名
- 1932 年 改訂版出版

祝祭日のテキストと基本的な主日日課が追加された。

南長老教会総会がこの礼拝書を採用することを決定。

- 1941年 北米長老協会総会は礼拝書改訂委員会を常設することを決定
- 1946年 改訂2版出版
 - エキュメニカルなリタージ研究の成果を取り入れる。
 - 改革者のリタージの研究が進展、その成果が取り入れられる。
 - さらなる会衆の参加が奨励されている。
 - スコットランド教会礼拝書から2年サイクルのレクショナリーを採用
 - 教会暦の記述を強調
 - 他の礼拝書の祈祷も含めた祈祷集

The Worshipbook – 1970

- 1955年 北米長老教会総会は礼拝書改訂を決議。しかしながら指名された改訂委員会は現行礼拝書と礼拝規準の間に大きな相違があることを指摘。改訂委員会は大会に対して礼拝規準が改定されない限りは礼拝書の改訂作業に入れないことを報告した。これにより北米長老教会は礼拝規準に170年間手を着けていなかったという事実気づかされる羽目となる。
- 南長老教会は北米長老教会の礼拝書改訂作業に参加するが、礼拝規準に関しては独自の者を作成することを決議
- 北米合同長老教会は1947年に独自の「礼拝の手引き(The Manual for Worship:いくつかの式順と式文を含んだ礼拝指針)」を出版していたが、北米長老教会の改訂作業に加わることにした。(北米長老教会と北米合同長老教会は改訂作業の終了を待たずして1958年に合同)
- カンバーランド長老教会も改訂作業に参加。彼らも独自の礼拝規準作成に着手、1984年に大会において採択された。
- 1961年 北米長老教会が新しい礼拝規準を採択
- 1963年 南長老教会が新しい礼拝規準を採択
- 1964年 試案第1版を出版
- 1966年 試案第2版を出版
- 1970年 *The Worshipbook- Services* 出版
- 1972年 *The Worshipbook- Services and Hymns* 出版
 - アメリカの諸教会における新しい礼拝書の潮流のさきがけとなった
 - エリザベス朝英語からの脱却と礼拝で使用するのに足る新しい言語の模索
 - 主の日の礼拝は御言葉と聖礼典であるということを規範として示した
 - 1955年に改訂委員会は新しいレクショナリーを提案していたが、カトリック教会によって作成されたものの方が優れていることがわかったので、それを長老教会向けに手を加え、改訂版礼拝書の一部として出版した。
- この礼拝書は非常に価値の高いものではあったが、第2バチカン公会議によって始まった礼拝革新

運動はカトリック教会のみならず、多くの教派に影響を及ぼし、結果として長老教会も礼拝書のさらなる改訂に着手することとなる。

Book of Common Worship – 1993

- 1980年北米長老教会は「教会が命を与えられる場の中心から改革されていくための道具」となるような新しい礼拝書の作成を決議
- 南長老教会、カンバーランド長老教会も改訂作業に参加することを決議
- 1984年から1990年にかけて *Supplemental Liturgical Resources* という題で試案を出版。これらの試案は50から100の教会で試用され、意見が委員会にフィードバックされた。
- 1983年 北米長老教会と南長老教会が合同。新たな礼拝規準策定を決議
- 1989年 礼拝規準採択
- 1993年 *Book of Common Worship* 出版

Book of Common Worship の特徴

様式と自由裁量(Form and Freedom)

- 改革教会の礼拝の伝統と式順の柔軟さを重んじている
- 様々なオプションを提供している
- 自由祈禱のためのガイドライン
- 自由祈禱か式文に則った祈禱かは自由裁量。しかし祈禱の様式如何に関わらず礼拝の形式は同じ

エキュメニカルな収斂(Ecumenical Convergence)

- 現在の礼拝改革（リタージカル・ムーブメント）は150年の歴史を持っている。それはカトリック教会の周辺から起こったが、第2バチカン公会議をへて一つの確かな流れを示した。
- ここ30年間、世界中の教会が礼拝改革に向けて動き出し、その流れは著しく収斂する傾向にある。（c.f. リマ文書）この礼拝書もそのようなエキュメニカルな流れの成果の影響を受けている。
- 信仰生活の基盤としての洗礼の重視
- 聖書の重要性を示すレクショナリーの使用(the Revised Common Lectionary)
- 共通の教会暦を使用することで公同の教会としての一致を強調
- 聖餐による一致、週ごとの聖餐の強調
- 宗教改革以前の歴史が共有されていることの再認識
- それぞれ違う伝統に建つ教会が、自らのルーツや起源をたどることによって、共有されている歴史に気づく。その結果が礼拝改革運動となって結実

改革教会と公同の教会(Reformed and Catholic)

- 真に改革教会的でかつ公同の教会を意識
- 改革教会の伝統：神中心主義
- 聖書的：式文での聖書的言語・メタファーの使用
- 神が現実の歴史に働いていることを強調：様々な現実的関心への対応
- 礼拝の自由さ柔軟さを可能にする様式
- 公同性：普遍的なスコープ、エキュメニカルな礼拝学の反映

一つの礼拝(Common Worship)

- 1970 版からの改訂に際して Common Worship という名前を復活させる
- 礼拝書は共通(common)の祈祷を含んでいる。（「古今東西」の祈祷）
- 祈祷と礼拝の様式は時代を場所を超えて教会が共有してきたもの
- この礼拝書は御言葉と聖礼典を中心に据えるキリスト教礼拝の長い伝統に忠実なもの

固有性と普遍性(Local and Universal)

- 礼拝において我々が生きている今現在の問題関心を表出することが重要
- 礼拝書の様式は会衆が自らの深い思いを祈りを通して表現する事を助ける
- 同時に礼拝の公同性・普遍性も重要

言語(Language)

続いて出版されるもの

- 按手礼、様々な就職式、献堂式等